

ぐる力学に注目してジェントリフィケーションの方向性を描写する手法は斬新であり、大変興味深かった。

こうした住民間の力学は、選挙戦にも表出するため、エスニック集団に背景を持つ被選挙人と、それを巡る住民や地域の選挙行動に、移民街リトルポルトガルと多文化都市トロントの特徴があらわれる（10章）。トロント市議会のポルトガル系候補者は、選挙区制度の幾度もの改変にもかかわらず、エスニックメディアを活用して票田であるポルトガル系コミュニティを巧みに取り込みつつ1988年以降の選挙戦で存在感を示してきた。選挙人であるポルトガル系住民と被選挙人の選挙行動から、エスニックな出自が同胞の連帯を強化しつつも、被選挙人は同胞以外の選挙人を見据えてエスニシティの表出を使い分けるといふ。ポルトガル系の被選挙人・選挙人がこの場所で経験した記憶が、場所に根差したエスニシティの種別性を生じさせつつある現象として興味深い。

第V部では、移民一世の高齢化により変容するポルトガル系住民コミュニティの姿を追求している（11章）。1960年代以降移住した移民第一世代はライフステージの後半にあるが、高齢にもかかわらず様々な理由により送出地と頻繁に往来する。そこにはカナダにおける年金受給、送出地の血縁者や地縁者との連帯維持といった高齢者ならではの戦略が見え隠れする。せっかくであるから、アゾレス諸島やマデイラ諸島の移民一世の原風景をのぞいてみたいという欲にかられた。大西洋をまたいでのフィールドワークに期待したい。

本書の読後感であるが、都市を舞台としたエスニック地理学研究を、ジェントリフィケーションや政治地理学と連携する方法を提示したという観点の斬新さが印象的であった。ますます多民族化が進行するグローバルシティをめぐる都市現象を、ポストモダンな切り口から観察するためのヒント

を与えてくれる。その点で、エスニック地理や都市地理に関心を寄せる諸氏にとって従来にない着眼点を示唆してくれる秀作である。同時に、よくぞここまで現地のポルトガル系住民コミュニティに入り込んでフィールドワークを実践した、と感服した。海外フィールドワークの経験のある研究者なら、研究対象のコミュニティとの関係を築くことが最初の難題であることは熟知している。それにもかかわらず筆者は、聞き出すのに苦勞することを容易に想像できる個々人の政治的嗜好からライフイベントといったきわめて個人的な情報まで収集している。学部生時代からトロントをフィールドとしているとはいえ、よほどの労力をかけなければ、ここまで現地住民とラポートを築くことはできない。本書は、海外フィールドワークに携わる研究者には共感と新たな知見をもたらしてくれるであろう。これから海外調査を目指す若い研究者には、ぜひ精読してほしいフィールドワークの手本となる労作である。前途ある筆者の益々の活躍に期待したい。

（石井久生）

**池田千恵子：『歴史的建造物の再生とツーリズムジェントリフィケーション』** 古今書院、2025年3月刊、211p., 3,000円（税別）

近年、インバウンド、オーバーツーリズム、空き家、まちづくりなどは、地理学の論考でなくとも、ニュースやネット記事でよく目にする言葉である。本書は、これらの現象に対し、ツーリズムジェントリフィケーションという視点からアプローチした試みといえる。あとがきにもある通り、著者が仕事と大学院生という「二刀流」で千辛万苦の末に書き上げた10編の論文を基に、序章と終章の2編を加えて構成されている。本書の構成

は次の通り。

## 序章 観光産業の需要に揺らぐ日本

### 第1部 インナーシティ問題と地域の再生

#### 第1章 インナーシティ問題とジェントリフィケーション

#### 第2章 町家のゲストハウスへの再利用と地域に及ぼす影響－京都市東山区六原－

#### 第3章 花街の衰退と観光需要による再生－京都市下京区菊浜－

### 第2部 歴史的建造物の再利用と地域の変容

#### 第4章 歴史的建造物の再利用と地域の変容－石川県金沢市ひがし茶屋街－

#### 第5章 インバウンド施策と商業施設の変化－兵庫県城崎温泉－

#### 第6章 アルベルゴ・ディフーズによる地域の再生－岡山県矢掛町－

### 第3部 リノベーションまちづくりと地域の再生

#### 第7章 家守によるリノベーションと市場の再生－新潟市沼垂地区－

#### 第8章 リノベーションによる中心市街地の再生－新潟市上古町商店街－

#### 第9章 リノベーションプロジェクトと新規事業者－長野県小諸市－

## 終章 持続可能な観光と地域再生

まず、序章では、近年のインバウンド観光客の増加、オーバーツーリズム、宿泊需要の増大、そしてCOVID-19の影響を踏まえ、本書の視角であるツーリズムジェントリフィケーションの必要性が論じられ、さらに新たな取り組みであるアルベルゴ・ディフーズを検討する意義も示唆されている。本書は3部構成だが、全体を通して、観光によってあるいは観光を活用することで地域が変化する際に現れる主体の特徴、その変化が地域にとって再生となるのかという問い、そして多様な主体

が存在する地域社会の葛藤を描き出すことが示唆されており、本書の構成と出発点が明らかにされている。

第1部第1章では、京都をインナーシティ問題の視点から捉え、元学区単位での分析がなされている。基幹産業の衰退、人口減少、空き家の増加、そしてゲストハウスへの転用といった現象が、豊富なデータに基づいた地図によって論理的に示されており、第1部の議論を支える強固な土台となっている。ただ、京都における空き家率の高い元学区と簡易宿所数の多い元学区にややずれが見られることから、それぞれの変化率の比較や元学区と主要な観光地や交通結節点との関係性を考慮することで、さらにより具体的な状況からの類推が可能になりそうだと可能性を感じた。

第2章では、第1章で抽出した六原地域を対象に、京都市で近年増加している町家を再利用したゲストハウスの実態と影響が検討されている。ここでは、地域に及ぼす影響を住民生活、不動産価格の高騰、商業施設の変化という三つの側面から整理している。さらに、住民がこれらの変化にどのように対応したのか、自治的組織が実施した不安軽減策も明らかにされており、負の側面にも目を向けた地域の葛藤を垣間見ることができる貴重な調査といえる。

第3章では、簡易宿所の増加が地域に及ぼす影響を検討し、COVID-19による観光需要激減の状況が報告されている。ここでは、外国人向けゲストハウスが増加した地域的背景に加え、日本人とは異なる外国人が抱く地域イメージが持つ可能性について言及している点が興味深い。また、COVID-19蔓延当時の様子が示されており、観光が成立するための基盤について改めて考えさせられた。

第4章では、金沢市のひがし茶屋街を対象に、北陸新幹線開業による観光需要の拡大に伴う地域

の変容とその影響を検討している。ここでは、補助金によって外観は伝統的な茶屋建築として景観が保全されているものの、建物内部は風情ある落ち着いた空間ではなく、観光客向けの商業空間へと変容している現状が指摘されている。そして、地域の魅力は単に景観だけで創出されるのではなく、地域の歴史や文化を踏まえた空間の特徴を継承する必要性が強調されており、景観保全のあり方、地域文化の重要性、さらに補助金のあり方を改めて考えさせられる内容となっている。

第5章では、城崎温泉におけるインバウンド戦略による外国人宿泊客の急増がもたらした影響を検討している。とくに、廃業後の旅館や商店を再利用した「豊岡鞆」販売店やカフェの増加は、建造物を継承することで景観保全には貢献しているものの、一方で地域の文脈を必ずしも継承しない空間も生まれている現状を、「和風原宿ストリート」という秀逸な表現で風刺している点に、著者の問題意識が表れているといえるだろう。

第6章では、岡山県矢掛町における歴史的建造物の再利用による「町ごとホテル」の取り組みから、アルベルゴ・ディフーズとして認定されるまでの過程と地域の変容について検討している。ここでは、外部資本の流入や不動産価格の高騰、住民の立ち退きといった問題がほとんど生じることなく、町家が観光資源として再利用された事例が紹介されており、持続可能な観光への重要な示唆にあふれている。「まるごと道の駅」という地域を巻き込む「〇〇ごと」という発想の広がりを確認できた点も興味深い。

第7章では、新潟市沼垂地区の旧市場における、不動産所有者による商店街再生の事例が示されている。ここでは、空き店舗の再生方法、それによる地域の再活性化、新規事業者の誘致、地域への影響などが言及されている。とくに、不動産所有者が実施した直接投資に加え、新規事業支援、地

域プロモーション、イベント企画、地域団体・起業支援、テナント選定といった「家守業」としての多岐にわたる役割を整理し、新規雇用の創出、認知度の向上、賑わいの創出、地域活性化への貢献といった地域への影響を明らかにしている。一人の人物が短期間で賑わいのある商店街を再生させた一方で、来訪者による迷惑行為などから、以前のような閑静な環境を望む住民の声も存在するという。この事例は、再生という結果だけでなく、その過程を含めた議論の必要性を示唆している。

第8章では、新潟市上古町商店街における空き店舗問題の解消と通行量の回復について、その取り組み、業種の変遷、新規事業主の特徴、地域への影響から明らかにし、遊休不動産の再利用のあり方を検討している。ここで注目すべきは、古参の事業者の役割である。新規事業者を地域再生活動の担い手として積極的に巻き込み、彼らが主体的にイベントなどを企画できるようにした古参の事業者の寛容性が、「個性的な（ここにしかない）」店舗が生み出される基盤となっているという考察の視点はとくに興味深かった。

第9章では、長野県小諸市におけるアルベルゴ・ディフーズの計画が中断された要因を検証し、その実現に必要な事項を検討している。従来の研究対象として一般的な成功事例だけでなく、断念に至った事例についての要因分析は非常に貴重であり、各主体の役割、関わり方、計画のプロセス、理念の徹底など、実現に向けた具体的な提言がなされている点は示唆に富むものである。

終章では、本書で取り上げた事例を整理し、遊休不動産の再利用の増加と地域の再生との関係性を考察している。そして、空き家の増加などの衰退した状態からツーリズムジェントリフィケーションを誘引するプロセスと、それに伴う負の側面に対する警鐘を示すとともに、アルベルゴ・ディフーズの可能性を含めた持続可能な地域の再生方

法を示唆している。上述の通り様々な地域を検討したことで、説得力をもって、互いに顔が見える一つの地域で対話を重ねることの重要性や、外部資本への適切な対応が重要となる点が改めて確認されている。

以上、各章の概要と興味深い点を述べた。本書の優れた点は、まず、いずれの検討も詳細な地域調査の成果に基づいているため、非常に具体的に地域の実情が理解でき、考察も説得力のあるものとなっている。

次に、アルベルゴ・ディフーズや「まちやど」という取り組みを地理学的な視点から検討している点に、本書の独自性がみられる。この宿泊施設の消費空間の「解放」が、単なる各主体の利益最大化ではなく、新たな理念の基に、空き家問題の解決や地域全体での広域的な消費を目指した実践である点は興味深い。ただし、「まち」という概念は多様であり、その中で各主体などが抱える葛藤や、意識を統一するための手段などについて、さらに深く知りたいと感じた。

最後に概念的な点での要望を加えたい。ジェントリフィケーションは地域の衰退を前提とする概

念ではないか。観光地化とツーリズムジェントリフィケーションの差異は何か。本書では、衰退した土地利用からの転換、競争原理による変化、そして「立ち退き」といった要素を包括的に扱っているため、議論にやや曖昧さが残る印象を受けた。地域には変化をしないという選択肢も存在した可能性も考慮すべきだろう。つまり、衰退を背景とした観光地化において、観光の論理が最優先されてよいのかという倫理的な視点が重要ではないか。負の側面について様々な指摘がなされている点は批判の余地はないが、ツーリズムジェントリフィケーションを強調して考察するのであれば、衰退からの変化に特有の課題や葛藤をさらに掘り下げることにも可能だったかもしれない。今後の研究において、さらなる精緻化を期待したい。

ツーリズムジェントリフィケーションという概念を導入し、喫緊の課題と様々な地域の実情を多角的な調査に基づいて提示した本書の功績は大きい。観光地理学はもとより、都市地理学をはじめとする様々な分野においても広く認識されるべき書籍といえるだろう。

(小島大輔)